

史跡 芥川城跡を歩く 資料

京都先端科学大学 中西裕樹(なかにしゆうき)

① 芥川城の歴史

○細川高国の築城

芥川城は、永正 13 年(1516)正月までに幕府管領で摂津・丹波等守護の細川高国(京兆家)が築きました。京兆家は幕府管領をつとめる大名で、戦国時代も在京しますが、家臣の能勢氏を配置して城を維持します。当時の京兆家は分裂しており、やがて細川高国は阿波の細川晴元に倒されました。この晴元は京都に入ることができず、天文 2 年(1533)～同 5 年の間を芥川城で過ごしています。

→各国のトップである守護の拠点は「守護所」と呼ばれ、代表例として周防大内氏の山口、越前朝倉氏の一乗谷があげられます。細川晴元は単なる守護ではなく、戦国の人々が「天下」と呼んだ京都を中心とする首都圏に強い影響力を持つ武将でした。そして天文 22 年(1553)以降、主君の晴元を放逐した三好長慶はあえて京都に入らず、芥川城で天下を対象とした支配を進めました。後に安土城(近江八幡市)から天下を支配した、織田信長の先例です。

○天下の政庁へ

実力で天下を握った長慶は、ヨーロッパでも「天下人」と認識されました。それまでの足利将軍が出していた「室町幕府奉行人奉書」は、長慶が芥川城に入った天文 22 年(1553)以降、永禄元年(1558)に将軍足利義輝が帰京するまでほぼ残っていません。長慶の裁きを求める京都の公家や大寺社らは芥川城に使者を遣わし、多くの武家や村人らが登城しました。京都や山城国、摂津国、丹波国の相論が裁かれ、堺や兵庫津といった都市の支配も進みました。芥川城は、広く天下支配の政庁として認識されていきます。

→家督を息子の義興(高槻市内の霊松寺に墓所)を譲った永禄 3 年(1560)、長慶は芥川城から飯盛城に移り、さらに勢力を拡大しました。ただし、芥川城には天下を支配する政庁の機能が残りました。

【足利義昭と織田信長の上洛】 永禄 11 年(1568)に上洛目前の義昭と信長が 2 週間逗留し、正親町天皇の勅使を迎えて新しい天下支配の表明と、将軍任官の手続きを進めました。これは三好氏の天下を変えるという P R が目的であり、その場にふさわしいと義昭と信長が選んだのが芥川城でした。

② 芥川城跡の評価

○時期が特定できる

東西約 500m × 南北約 400m に及ぶ摂津国内最大の山城です。北・西面を摂津峡の急斜面、南・東面を地形の高低差に加え、曲輪の切岸と堀切・豎土塁などの防御施設で守っています。大きく城は西・中央・東の曲輪群のブロックに分かれ、西曲輪群に主郭(本丸)、中央曲輪群との間の谷筋が「大手」にあたります。一方、東曲輪群には土塁囲みの曲輪がありますが曲輪の造成は不明瞭です。

→調査の結果、西・中央曲輪群では長慶らが在城した 16 世紀の遺物が多く、東曲輪群では数自体が少ないことが判明しました。西・中央曲輪群が山城の本体で、東側曲輪群には出城のような機能が想定できます。また、当時の記録からは城は永正 13 年(1516)までに築かれ、永禄 12 年(1569)春には城主和田惟政が居城を高槻に移したことが知られます。これは考古資料の分析と一致します。当たり前のように、文献・考古の評価が一致しない山城もあるのです。

○山城の実態が解明

細川晴元以降、この芥川城は天下支配の場となり、晴元や長慶は文書を出しました。ということは、常に城には多くの家臣がいたこととなります。長慶の時代には、松永久秀らの重臣や奉行人が家族を伴って居住し、儒学の講義や連歌会が行われたとの記録が残ります。発掘調査では主郭(本丸)で火災後の大型礎石建物、主郭直下で塙列建物(櫓か)を検出(一部は瓦も使用)、伴膳・調理・貯蔵に用いる食器が出土しました(宴会等に使う土師皿の破片は 3,000 点以上)。文具や茶道具に加え、床の間に飾るような「宝物」を含まれています。

→現時点で当時の記録(古文書などの一次史料)が 91 件 148 点、軍事物・系図等 30 件 67 点が確認。弘治 2 年(1556)正月には、火災と醍醐寺からの建物移築の記述もあり、山城を拠点とした権力に関わる人々の活動を具体的に示します。

→登城者の目を引く場所に大型石材を用いた面を持つ石垣が存在し、瓦も確認されました。織田権力の下で、高石垣・礎石建物・瓦の使用、枳形虎口や天守を特徴とする織豊系城郭が成立し、近世城郭への系譜となりますが、芥川城にはこの直前の拠点城郭の到達点が多角的にあらわれています。

☆ 名称の問題 なぜ「芥川山城」ではなくなったのか

同時代の記録において、城跡は「芥川城」の他、単に「芥川」「城山」との名称で呼ばれていました。天文 16 年(1547)の「享禄天文之記」のみ、「アクタ川山城」と記しています。この「享禄天文之記」とは、奈良春日大社の日記(抜書)です。大和国では、筒井氏や十市氏らの武家が平地に居城を構え、その争

奪戦が生じた際、山城へと逃れて奪還の機会をうかがいました。やがて、筒井氏らはこの山城で政治を行うことが増えたので、当時の大和の記録には普通名詞として「平城」と「山ノ城」の語が見えます。おそらく、この感覚で「享禄天文之記」の主は「アクタ川山城」と書いたのでしょうか。ちなみに、この前年には「アクタ川城」と記しています。

→1977年の『高槻市史』では、「大山」に芥川城が築かれたとする『瓦林政頼記』の記述を永正17年(1520)の出来事と理解しました。しかし、永正13年に連歌師の宗長が芥川城で能勢頼則の連歌会に参加したと『宇津山記』に記しています。市史が書かれた当時は、武家の拠点の拠点は平地の居館にあり、山城は戦時の詰め城という考え方(根小屋式城郭)が強くありました。そこで、永正13年の城跡にJR高槻駅近くの西国街道・芥川宿に残る「芥川城」伝承地を比定し、永正17年の山城である芥川城とは別のものと評価しました。そして後者を「芥川山城跡」と呼んだのです。

→しかし、山に築かれた芥川城が天下の政庁であったことは明白です。また、『瓦林政頼記』の記述が永正13年以前を指すことも判明しました。遺跡と歴史を正しく認識するためには、昭和になって付けられた名称ではなく、戦国の人々が使用した名称を使う必要があります。

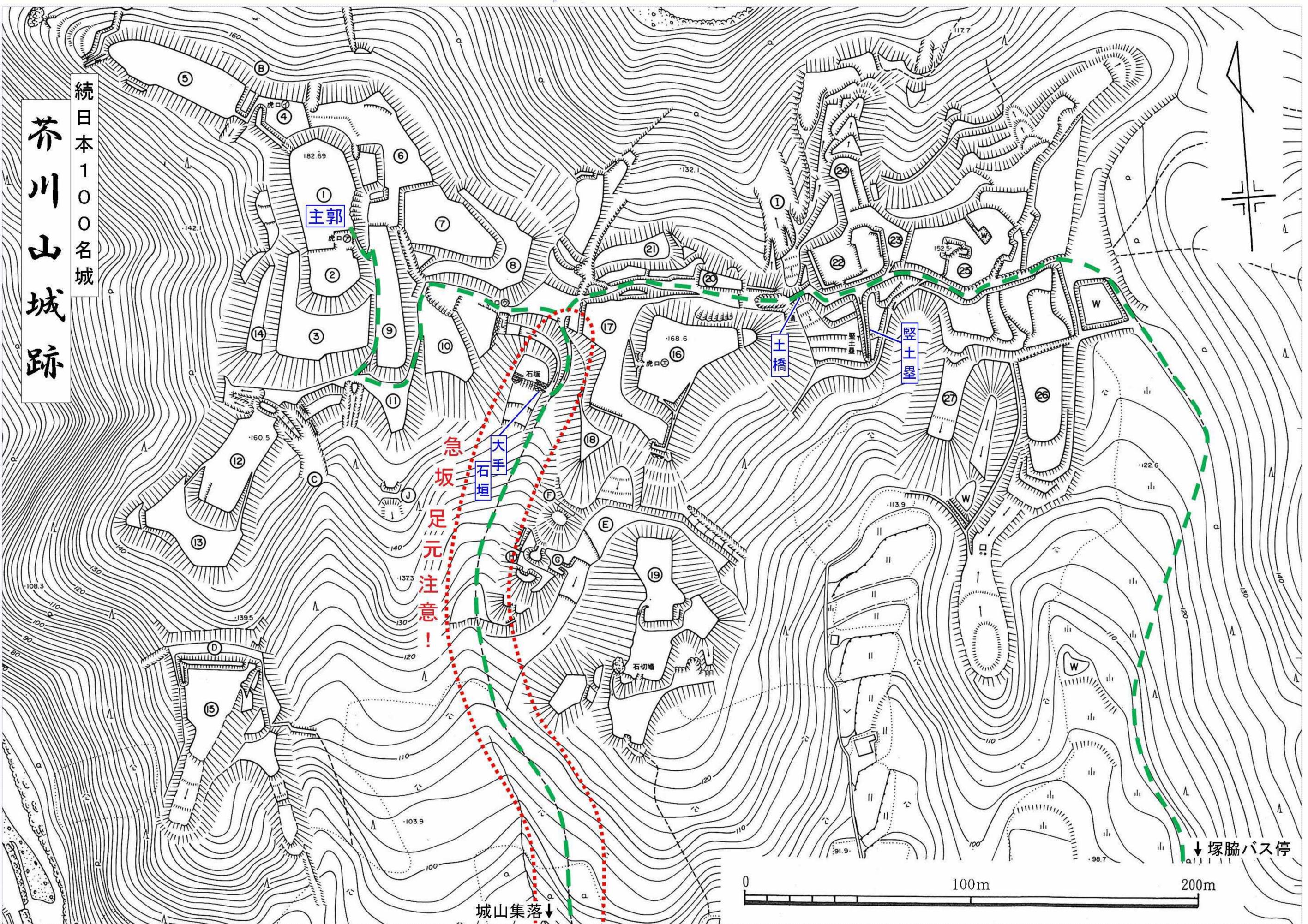




芥川城跡 レーザー航空測量 赤色立体地図

芥川山城跡

続日本100名城



○ 数字は郭(くるわ) — — は山道
○ 英字は掘切

※途中に獣除けの柵があります
扉を開けたら、必ず閉めてロープを結んで下さい